

| | | | |
|-------|-------|---|--------------------------------------|
| 団体名 | | 松江おもちゃの病院（島根県松江市） | |
| 団体の概要 | 活動開始年 | 1994年 1月 活動開始 | |
| | メンバー | 人数 | < ボランティア数 > 15名 |
| | | 構成 | 定年退職の男性、主婦、会社員男性 体験学習の一環として中学生も参加 |
| | 予算規模 | 平成13年度概算 ・収入 ¥40,000(基本的には松江市ボランティア協会(現・連絡協議会)からの助成金。年度によっては、企業からの助成金をもらうこともある。会費は徴収していない。) ・支出 ¥39,148 | |
| 団体の目的 | | ・子供とともに生きる心の病院として、「心の豊かさ」の課題意識を啓発するとともに、子供が大切にしているおもちゃの修理を通して、子供たちに物の大切さ、命の尊さを知らせ、心優しい子育てに貢献すること。 | |

ボランティア活動の概要

定期的な日時に都合のつくスタッフが集まって「病院」を開設し、ボランティアでおもちゃを修理する活動を行っている。時には関連組織、団体などのイベントにも参加して、「病院」を開設している。

おもちゃの受付件数は少しずつ増えており、平成13年度3月末の合計で、1,190件になる。

活動場所は松江市子育て支援センターや松江市津田公民館、松江市ボランティアセンターなどの場所提供を受けている(料金は無料、公民館は光熱費のみ)。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

現在の「おもちゃの病院」開設以前に、松江市の工業専門学校の学生数名が同様の活動をしていたが、卒業などで継続していくことができなくなり、活動がストップしていた。そのため、当時の工具等が松江市ボランティアセンターに残っていた。

平成5年度にボランティアセンター主催で、「ボランティアワーカー養成講座(以後8期まで開催)」が約一年間にわたって行われた。同講座は、ボランティアのリーダーないしコーディネーターを養成するための講座であった。

講座修了後、その一期修了生の中から有志を募ってボランティア活動を始めることとなった。ボランティアセンターから以前のおもちゃ修理の活動について紹介があり、電気関係の技術を持った人が受講生の中にいたので、彼を「院長」として、「おもちゃの病院」

が始まった。

最初はどのようにPRしてよいか分からず、市内の保育所などを回り、説明しながら、おもちゃを集めて修理していた。初めてイベントに参加した際、手作りのポスター、チラシを用意し、松江市の幼稚園、保育所の園長会でお願いして置かせてもらった。それ以後、イベントなども合わせて、少しずつ知ってもらえるようになっていったと思う。

松江市ボランティアセンターには、開設当初から協力してもらっている。立ち上げ時から工具や事務用品などの収納のために、ボランティアルームの中にロッカーを用意してもらい、その上、事務局もボランティアセンター内に置かせてもらっている。また、開院日ではない日におもちゃを持って来る方の対応もしてもらっている。こういった面では、非常に恵まれている。

ボランティア活動に役立っているスキルの向上の工夫

立ち上げ当初には、多少の予算と工具などは揃っていたものの、電気技術を持っている者が1名しかおらず、手早く対処しきれないことが多々あった。当初はメンバーをボランティア講座の修了生に限っていたが、修了生は女性が多く、技術を持つ人がなかなかみつからなかった。

そこで、市の広報で会員募集の呼びかけを行ったところ、主に退職者を中心にボランティアが集まった（中には中学生もいた）。現在では、活動を行うにあたって、ボランティアの電気関係の技術、木工関係の技術、裁縫関係の技術を活用している。

また、受付方法やカルテの整理などまったく手探り状態であったが、「おもちゃ病院連絡協議会」のカルテ様式などを利用しながら改善に努めた。今後も自分たちに使い勝手のよいように改善していきたい。

活動を継続するための心構え

活動日に出掛けることについて、絶対に無理をしないようにしている。

一方、ボランティアだからと言って、決していい加減なことはしないようにしている。また、個々に責任をもって対処することなどに気をつけている。修理について個々人で分からないことがあった場合などは、その都度メンバー間で話し合い、協力して取り掛かっている。そして、活動を楽しもうと心掛けている。

ボランティア活動を行う上での困難点や課題

ボランティアの募集方法は、「スタッフ募集しています」というチラシをイベントなどで配布したり、個々に誘ったりしている。できる限り活動を続けていきたいので、今後につなげられるような若い年代のスタッフがもっと欲しい。そのために、仕事を持っている人でも活動しやすいように定期活動日について検討していきたい。

現在、「親子で一緒に修理しましょう」と呼び掛けているが、あまり効果がない。また、

できる限り、子供たちの目の前で修理したいとの夢があるが、思うようになっていない。これも定期活動の開院曜日と関係があるかも知れない。

これらを踏まえて、定期活動の曜日に日曜日を含めるよう変える予定。

また、活動資金は現在は徴収していないが、今後の具合を見ながら、会費を徴収するかどうかについても話し合っていきたい。



<ただいま診察中>

(団体代表によるレポート、団体代表及びボランティアセンターへのヒアリング調査、団体資料より作成)

<事例のポイント > ボランティア養成講座が活動開始のきっかけ

この事例では、ボランティアセンターが「ボランティアワーカー養成講座」を主催し、人材育成を行うとともに、受講者に対して活動内容の紹介を行っている。ボランティアセンターがきっかけを作った事例である。さらに、ボランティアセンターは連絡の取り次ぎや備品の収納などの事務局代行機能を果たしており、この活動の継続を支えている。

行政からは場所の提供や広報などで支援を受けており、公的支援を上手に活用して活動していると言える。

<事例のポイント > ボランティア活動の心構えをしっかり意識

ボランティア活動は、活動する本人の自主性・自発性が重要であり、無理をしないで、楽しんで取り組むことは、活動の継続のためにも大切な姿勢である。しかし、社会と関わっていく活動である以上、無責任で許されるものではない。ボランティア活動を進めていくためには、「無理をしない」「活動を楽しむ」「責任をもって対処する」「分からない場合は協力する」といったバランス感覚が必要となる。

<事例のポイント> 子どもとのふれあいが活動の原動力

ボランティア活動は、単にスキルを活かすことだけでなく、メンバーが活動を楽しむことができるかどうか重要である。この事例では、おもちゃの修理という活動を通じて、子どもとふれあい、子どもから素朴な賞賛を得ることが、活動の原動力とも言える“楽しみ”や“やりがい”となっている。

一方、この事例の場合、その願望が必ずしも満たされていない点も指摘されている。地域のニーズを掴み、かつ、自分たちの願いを満たしていくために、活動スケジュール（曜日）や呼びかけの対象など、ボランティア活動の進め方について再考していくことが課題となっている。

<事例のポイント> 活動内容にあわせて、メンバーの範囲を拡大

当初はメンバーをボランティア講座の修了生に限定していたが、修了生の中では活動に必要とされる技術者が集まらなかったため、広く一般に募集をかけ、現在のメンバーを集めている。

きっかけがボランティア講座であっても、活動内容にふさわしいメンバーを集めていくためには、柔軟にメンバーの範囲を考えていくことが必要である。